分野別意見交換会報告書　【建設水道常任委員会】

開催日時：平成31年(2019年) 2月26日（火） 15時30分～17時05分

開催場所：箕面市役所委員会室

団 体 名 ：止々呂美ゆず生産者協議会

[redacted]

出席議員：委員長　岡沢　聡、副委員長　武智秀生、委員　牧野芳治、川上加津子、名手宏樹

傍聴者数：　1名

テ ー マ ：止々呂美ゆず生産者協議会の活動について

番号	項目	内容
1	止々呂美ゆず生産者協議会設立にあたっての経緯紹介	平成21年に市主体で活動を開始。市長より滝、もみじの他に食べ物で箕面をPRしたいとの話があり、1月には自らゆずの収穫も体験された。3月に「ゆずともみじの里みのお」推進協議会を市、JA、商工会議所、農業者で設立、5月には「止々呂美ゆず生産者協議会」を設立した。平成23年には「ふるさと自然館」がオープンし、「加工室」が整備された。
2	ゆず生産にあたっての課題	止々呂美のゆずは、接ぎ木ではなく、野生の種から育てる「実生」ゆずで収穫まで18年くらいかかる。すぐに増やせない。野放しでは収穫できず、無農薬でいい品質のゆずを収穫するには毎年の剪定が必要。サポーターのお手伝いはいただいているが、ゆず木の剪定、木に登って収穫できる人は協議会でも5，6人で人材不足が課題。
3	収穫後の加工処理にあたっての課題	加工処理は、11月～12月で、古くからやられてきた「生活改善グループ」のマーマレードづくりと時期が重なる。協議会では、地元ゆずのスライス、ペースト化、果汁化の加工を行うが、自然館の加工場がこの時期、手狭になることが課題。
4	今後の生産を継続するにあたっての課題	収穫は協議会とサポーターで行うが収穫物はJAに納品され代金をもらう。買い取り価格がもっと上がれば取り残しも減って、生産者が高齢になっても意欲が生まれる。
5	その他止々呂美特産物に関して	クヌギやコナラを木炭として大きな収入源であったが石油が入ってきて廃れた。その後、それらを椎茸栽培の原木として利用するようになり特産物となった。昭和50年頃が止々呂美の特産物販売額がピークとなる。特にビワの販売額は大きく、他にも、栗、山椒、柚子、梅、椎茸、いちご、米などを栽培出荷してきた。都会に近い村として、山林を開墾し、果樹主体の生産が村の特色。金額が上がれば生産者も栽培するようになる。
6	ゆずの出荷量は？	平成19年6t、平成20年2t、平成21年10t、平成22年3．4tと表年裏年になるケースが多い。平成27年が最大12tの収穫で平成30年は7．3tと毎年変動している。ゆず商品が売れても多くは作れない。NHKなどでもたびたび放送され、ブランド化し生産量も増やしたいが、先のように買い取り価格が低いことや加工場の受け入れに余裕がないことが増産への課題だ。

番号	項目	内容
7	高知県の馬路村はゆずで売り上げ33億円など報道されているが？	生産体制、資金などが全く違う。馬路村のゆず栽培はJA直轄で生産者もJAに雇われている。田もつぶしてゆず畑にしている。止々呂美では木を増やせないし、1次加工も大量処理できるようにしていかなければならない。馬路村のようにするならもっと外部の介入が必要だ。
8	今後のゆずブランドについての要望は？	農協は栗、ビワも苗木の補助など奨励金で半額補助されているが、ゆずでは接ぎ木でなく「実生ゆず」を売って奨励してほしい。また、出荷奨励金の単価を上げる補助をしていただきたい。商工会議所とも出荷について調整を続けているが、いいゆずを出荷した生産者に奨励金を進呈すれば効果的だ。
9	箕面のゆずの出荷単価の変化と品質基準は？	農業祭で売る「秀品」ゆずと「優品」と「規格外」ではキロ単価が倍ほど違うのが問題。主にしぼり汁にする「規格外」ができて「優品」が一時的に「規格外」に吸収され少なくなったが、その後、徐々に農家の努力で「優品」が増えてきた。「箕面の出荷単価表」にあるように出荷単価も平成21年から29年に「優品」で51%上昇するなど「ゆずは止々呂美の宝」と言われるようになった。
10	木に登り収穫できる人を増やせば収穫も増やせるのでは？	その通りだが、まずは、世話ができていない木を世話して、収穫できるようにするのが大変だ。併せて、鹿による食害対策のためのネット設置も必要である。